

哲学研究

第四百九十五号

第四十三卷
第一册

Suppositio の諸階型

——「意味の研究」其の五——

山内得立

—

suppositio とは屢々述べられたように「根柢に置く」(sub-ponere) ことである。我々はこの作用を原理として意味の問題を説明しようと試みているのであるが、しかし「根柢に」とか「置く」とかいうのは如何なることであるか。それにも種々なる考え方があり、また推移もあるが、むしろこれらの発展を通して本来的な意義を明らかにし、且つそれを原理的なものにしよとすのが我々の目論みであったのである。

先ずこれに類似した語として *substantia* があり、それは「根柢に立つ」ものを意味するのであるが、共に「根柢に」でありながら、「立つ」ことと「置く」こととの間に如何いいう区別があるのであるか。それともこの二つは何らの区別をももたぬのであるか。アリストテレスでは「根柢に立つ」ものと「根柢に横たわるもの」(*hypokeimenon*) とは大体同じものであり——厳密に言えば勿論異なつてはいるだろう——或は同様に使用せられているが、「根柢に立つ」ことと「根柢に置かれ」たものとは決して同一ではない。むしろこの両者を峻別することが中世の思想を古代

のそれから區別し、そして中世の考え方の特色を明らかにする所以のものとなっているのである。古代ギリシヤに於いては substance の概念はあつても suppositio の思想はなかった。後者は中世のスコラ哲学に於いて初めて考えられたものであつて、この点に中世の論理が必ずしもアリストテレスのエピゴーンではなく、況や論理学はアリストテレス以来、一歩も進展しなかつたという断定の誤謬であることが明らかにせられ得るのではないかと思われる。

それはとにかく、先ず「根柢に立つ」(substance) のとは何であるか、それはいうまでもなく、本体又は実体である。我々の直接に経験するものは事物の現象であり、且つそれしかないのであるが、現象は様々であり、たえず變化するが故にもしそのみか唯一の存在であるとすれば甚だたよりないものであり、支離滅裂とさえなつてしまふ。また、現象は何ものかの現象でなければならぬ、何ものの現象でもない現象といったものは不可能であるばかりでなく矛盾でさえある。諸現象の原因として、或は少なくともその由来するところのものとして、何ものかがなければならぬ。それが本体であり実体である。そしてそれは諸現象の根柢にあつて、これを支え保ちそして一個の實在たらしめるところのものである。

次に、本体はどのように現象の根柢にあるものであるが、そのあり方は「立つ」ということである。立つとは単に有るのみでなく、それ自らに有り、他に依つてではなく、自らに依つてあり、他に従つてではなく、他に先んじてあり——一言にいえば自存することである。そこに横たわることとは尚幾分横たえられたものであるが、立つことは自らによつて、それ自らとしてあることである。自存するのみでなく独存するものでさえある。即ち個物であり、個体である。個体は一つの実体であり、我々がそれを認識すると否とに係わらず、それ自らそこに存在すると考えられる。しかし、我々の認識し得るものは依然として現象であつて本体ではない。直接に与えられたものはひたすらに現象のみであつて実体ではなかつた。何故に現象の根柢に本体があると考へねばならぬのであるか。蓋し現象は何ものかの現象である以上、現象するところの何ものかがなければならぬ。現象は種々なる象面であるとすれば、これを諸面と

するところの実体そのものがなければならぬ。本体が原因となり現象を結果するのではないにしても諸現象の由って来るべき実体がなければならぬ。諸現象が寄って以って一つの個体を形づくるべき何らかの基体がなければならぬ。

——現象の根柢に本体を立たせるのは恐らくこれらの理由によるのであろう。

しかし、それにも拘らず、我々の経験するものは依然として現象のみである。直接に与えられた諸現象の外に、それを超えて何を把握し得るといふのか。それとも物自体は何らかの方法によって——特殊な認識力によって端的に直下に把握し得るものであるか。たとえそのような特殊な方法によるとしてもそこに現われるものは依然として現象であり、そこにあるものはそのような現象であるより外はない。現象とは文字通りに事物の現にそこにあるところの表態に外ならぬのであるから。いずれにしても認識の場面は現象の世界であり、それを描いて、又はそれを外にしていずこにもなかった。直接に与えられたもの (*la donnée immédiate*) とは即ちその謂いであつたのである。

してみると現象の根柢に立つものとはそれ自らに有るものではなく、「置かれたるもの」でなければならぬのではないか、それは *sub-stare* ではなく *sub-ponere* のものではないか。置くといふのは立つこととは勿論、有ることとも同一ではない。この区別は微妙であるが些細でなく、況や瑣細ではない。先ず次の点が考慮せらるべきである。置くとか置かれたものといへば直ちに誰によって置かれたものであるかを問いたくなるであらう。しかし、そういうものは決して誰れによつてもなかった。もしそれが我々によつて置かれたものであるならば主観的観念論となり、自然によつて置かれる時は唯物論となり、神によつてであるならば、神秘説となるであらう。我々の言うところはこれらの孰れでもなかった、またあつてはならぬ。置かれるといふのは誰れによつてもなく、ただそこに置かれてあるのである。現象の根柢に実体が置かれてあるのみである。置かれねばならぬからして置かれたのではなく、置かれてあつたからして置かれるのもなく、ただそこに置かれているのである。またたとえばカントに於いてのように原因として置かれたものでもなく、ライブニッツの考えたように、理由として置かれるべきものでもない。ただ置かれ

てあるが故に置かれてあるものなのである。

置かれるとは存在の一つの有り方とも考えられるが、それとは必ずしも同一ではない。それはただ有るのではなく置かれて有るのである。置くことは有ることの一種ではなく、有ることに何ものが加わっているのである。後の結論を先取していえば、それは単なる存在ではなく「意味」をもったものであり、ただ有るものではなく、有ることを意味するものでなければならぬ。現象の根柢に実体が有るのではなく、それをそこに置くのは現象としてただ存在するに止らず、それをして意味ある存在たらしめんがためであった。現象が意味をもつというのはそれが何ものかの表現として真に現象たらしめんがためであったのである。

論歩をそこまで進めることは尚早に失するであろうから、我々はもう少し「置くこと」の性格に止って二三の考案をめぐらそう。

置くということはややもすれば^{仮りに}置くことと混同せられる。置くことが誰によってもないにしても、置かれるとは一般に仮置せられたものと解せられ易い。suppositio は hypoteca と同一視せられ、それは仮定又は仮設を意味する。置かれたものは有るものでなく仮りに置かれ仮りに定められたものにすぎない。suppositio の第一の階型は「仮定」である。もしそうならば、それは存在性の稀薄なものとなり、少なくとも確實ならざるものとなってしまふ。現象の根柢に実体を置くのは単に之を仮設することにすぎないのではないか。実体が真実にあるものでなくして仮に有るものならばそれは実体の名に値せぬこととならねばならぬのではないか。

ここに於いてスッポジチオは第二の階型に移らねばならぬ。即ちそれは「根柢に」置かれたものでなく、「代りに」置かれたものとならざるを得ぬ。sub は「根柢に」から「代り」に変じ、仮置は代置に変ずるのである。

しかし、代置の思想はなお多くの仮定的なものを残している。一つのもの代りに他のものを置くのは必ずしも一定したものではなく、便宜的にであるかもしれない。代置は要するに代用にすぎなかつた。例えば犬という語は多

くの様々なる犬に代って置かれたものであるが、これを犬とよぶか *dog* と名づけるかは便宜的であり、乃至は習慣によるのかもしれない。これらの動物を犬とよばねばならぬ必然性はそこにはなかったのである。一つのものの代りに他を置くのはそれ故に仮置的であり、仮りに置かれたものは単なる代用品であるにすぎない。代用品は勿論代理であるが故にそれ自身の価値をもたず、時としてその存在を主張することさえ許されない。それは一に對して他を置くことである。他に代って一が置かれることである。一と他とは互に対応はしても必ずしも内的又は必然的關係にあるとはいえない。現象に換えて実体を置くといっても、両者が如何なる關係をもつかは不明であり、存在の代りに意味を置いて見ても之等が互に如何に關係するかは必定ではなかったのである。

ここに於いて「代置」の關係は次に「代表」の關係に移らねばならぬ。それが *suppositio* の第三の階型である。代表とは一と他との対応ではなく一と多との対応であり一が多を内包し、多が一を表示するような關係である。それは単に多なるものが一によって *present* せられ、さらに *represent* せられるのみでなく、一が多の *representative* なものとなることである。単に代って置かれるのではなく、代って表わすことである。単なる代用でなく、それ自らの価値をもち、それ自らとして存在するものである。代表者は多くの人々の意見をうけ容れながら、自らの自主性と權威とを失わぬものでなければならぬ。さもなければ彼は代表者ではなくして単なるロボットにすぎなくなるであろう。代表は他が一に代用せられることでなく一が多を内包し、そしてこれらを表出するものでなければならぬ。それがスッポジチオの第三の階型であり、そしてまた最終の階型でもあったのである。

suppositio の第一階型は「根柢に」(*sub*)置くこと(*ponere*)であったが、第二は「代って」置くことであり、第三は代って「表現」することであることは以上によってのべられたが、さて然らばこれによって「意味」の問題は如何にして説明せられ得るだろうか。意味が表現であることはあまねく知られたことであるが、そのように言われるのは何を意味するのであるか。表現とはそもそも如何なることなのであるか。我々はこれを *suppositio* の作用として

解明しようとするのであるが、果してそれが可能であるかどうか、——それらが次節の問題となるべきであろう。

二

個物は一つの実体であり実体は何らかの仕方に於いて現象する。我々の直接に経験するのはこの様々な現象面であるが、それらが現象である限り、何ものかの現象でなければならぬ。空間的に様々な様態をもち時間的にはたえず変化する現象は必ず何らかの現象するところのものそのものを予想せしめないではおかない。それが実体又は本体 (substance) の概念であった。しかし、それにも拘らず、我々の直接に経験するのは依然として現象面であって、それ以上の又はそれ以外の何ものでもない。実体とは要するに想定せられ乃至予想せられた概念にすぎないのではない。殊に現象は多であり、変化であるに對し、実体は一であり、恒常であるとするならば、これらの二つの存在が如何に關係し、何によって合一すべきかが容易に解決し得ぬ問題として残らざるを得ぬであろう。古今の形而上学者を悩ましてつづけた問題も畢竟はそこにあった。現象即本体、本体即現象などという論理も現実に我々を満足せしめ得るものではない。この困難の主なる理由は現象と本体とを共に存在として把握する点にあるといえる。我々にとっては実体は現象の根柢に立つものではなく、その根柢に置かれたものである。それは *sub-stare* 又は *sub-status* のものではなく、*sub-ponere* 又は *sub-positus* のものでなければならぬ。ついに *substance* から *suppositio* に移るべき第一の契機があるわけであるが、前述の如く、そのような考え方には種々なる誤解がつきまとわれ易いから、先ずその点を折伏しておこう。

根柢に置くといえば、如何にも人為的であり、置かれるとは何人によってであるかという質問も出易いのであるが、それは問題ではない。少なくとも問題の外におかるべきであることは既述の如くである。次に置くとは仮りに置くことであり、仮置的なものは不定であり不確定であるから実体の概念をなさぬ。高々それは仮設 (*hypothesis*) にすぎ

ぬ。仮定的なものほど実体の概念から程遠いものでないかと難ぜられるかもしれない。スッポジチオが第一の意味から第二をへて第三の概念に移らねばならぬ理由もそこにあるのであるが、暫らくここに踏み止って種々なる問題を考へて見よう。実体は勿論眞実なる個体であり、現象が移り易く、種々なる象面であるに對して、それ自らに牢乎として實在するものと考えられる。それはそれ故に現象のほかにも、それを越えてまで想定せられるのである。単に想定せられるのではなく、まさにそのものとして實在すると考えられるのである。しかし、直接に我々の經驗するものは依然として現象の世界であつて、たとえこの実体を直觀し得る特殊な認識能力があつても、やはり現象を通して、少なくともそれを手がかりとしてでなければ不可能であることも明らかである。實在は現象と同一であり、現象を見ることは即ち實在を把握する所以であるというならば、何故にこの二つを區別するのであるか。現象即本体という論理は、先ずこの兩者を明別し、然る後に即の論理によつて結合するのであつて、決してこれらを同一視するものではない。即とはどこまでも相反しながら、しかも同時に連關することをいうものでなければならぬ。それともここに絶対知と相對知とを區別して二種の認識を分離しようとするのであるか。しかし、そのようにしても二種の知識はさらに如何なる關係を有するかが問題となる。絶対知の主張者も直接なる經驗を全面的に無視するほどに勇敢ではないであらう。俗諦から眞諦に転ずることが宗教の信知であるとしても眞諦はやがて俗諦に還相しなければならぬ。我々にとっては經驗にあらわれる現象が唯一ではなくとも重なる知識の場面であることだけはたしかである。それは直接に与えられたものであり、我々がこれを出発点とするのはそれが直接なる事實であるからであるに外ならなかつた。

しかし、それにも拘らず、現象の外に又はその根柢に実体を立てるのは何故であるか。それは現象が何らかの事物の現象であり、現象には現象する実体がなければならぬという固定觀念によつてである。我々の固執すべきはこの觀念でなく与えられた直接經驗であり、たとえそこに実体があつても直接經驗によつて、又はそれを通してのみ想見し

得られるということではなければならぬ。実体は経験の根柢に有るものではなく（況んや立つものではなく）、ただそこに置かれたものである。我々はそう考えることよつてのみこの問題を正しく解明すべき手が見出し得るのである。そこで置かれたものは現象に於いて、又はそれを通して想見し得るものである。想見するというよりも僅かに望見し得るものである。それはその故に *intend* されたものであった。指示とはそれに対しそれに向つて志ざすところの作用である。指示されたものが近くにあるか遠くにか、或は時として到達し得ぬまでの遠さにあるかは問題ではない。とにかく指示するものとされるものとは何程かの距離をもつてゐる。指された月は天上遙かなる彼方にあるであらう。精神作用がインテンチオを特色とするのもそれが何かの事物を指示するところにある。そして事物がこのように指示せられることが即ちそこに置かれるということとなるのである。

それ故に実体が現象の根柢に在るのではなく、そこに置かれたものであるというのは、指示作用によつてそこに指定されたものであるということではなければならぬ。我々は経験によつて、又はそれを通して何ものかを指示し、さらにはそれを指定する。しかし、指示せられたものは何ものかであつて、その何たるかは未定であり、或いは遂に明定し得ないかもしれない。この点に於いてそれは仮置とか仮設とか云われるのであるが、しかし、その故にそれは架空のものと考えることができない。たしかにそこには何ものかがあるのである。この何ものかを或るものとして規定するのは如何にして可能であるか。否そのことが果して可能であるかどうか。

この問題を解決するのは単なる *intention* だけでは不十分であらう。なぜならそれは単にこれを指示するのみであつて、それに到達することは勿論その何なるかをも知らぬからである。

我々は先ず、この点に執着して、あるものを或るものとするのは何であるかを問わねばならぬ。この問題に當つて、そこに実体とか本体とかを挿入することは容易であるが、しかしそれは許されない。なぜなら、それは問題を解決するよりも却つてこれを逆戻りせしめるだけであるであらうから。

与えられた経験はたしかにそこにある。たとえそれが幻覚であり錯覚ではあっても、とにかくそのようなものとしてそこにある。これを幻覚であるということすら、既に所与の経験を離れている。与えられたものを幻覚として知ることが既に有るものを或るものとして規定しているのである。知るといふのは必ず有るものを或るものとして知ることとでなければならぬ。或るものとは何ものかであり、その何たるかを知ることがそれを知るといふことである。何らかの或るものとしてでなければ一般に知るといふことが不可能なのである。例えばそこに赤色が与えられているとせよ。それが色であるということすら既に或るものとして規定せられているのであるが、赤色がバラの赤さとして知られることによってのみ之を知ったといえるのである。赤色が夕日の赤さとして扱えられるときは誤謬となるが、それが誤謬であると知ることさえ、既に或るものとして扱えられているからに由る。赤色をバラの赤さと知ることが赤の感覚の根柢にバラを置くことではない。赤色をバラの赤さとして、知ることである。バラの花があって赤色がその属性として附着せられるのではない。直接に与えられたものは赤色であって、バラの色ではなかった。そこにバラの花があるといふのは赤さに於いてバラを見ることであり、それを通してでなければバラの花は見られ得ないであろう。バラが赤いといふのは赤さの経験をバラの赤さとして見ることによってのみ可能なのである。

感覚は与えられたものを直接に受容することであるが、知覚はこれを何ものかとして把握することである。よく言われるように *Empfindung* (感覚) は *empfangen* (受容する) するからであるが、*Wahrnehmung* (知覚) は *als-wahrnehmen* (真としてとらえる) することとでなければならぬ。知覚はただ外界から印象をうけとるだけではなく、これを何ものかとしてとらえることでなければならぬ。そしてこの「としての性格」(*als-charakter*) が知覚を感覚から峻別する所以のものとなっているのである。それはただ赤色を感覚するだけではなく、これを何ものかとしての知覚する作用である。単に見るのみでなく、知ることはこのようにして初めて可能となる。見ることが即ち知ることであるのも専ら知覚によってであった。それは感覚の根柢に事物を立てるのではなく、之を置くことであった。

実体はそれ自らにそこにあるものであるよりも、そこに置かれたものでなければならぬ。根柢に立てるということすら既に置くことを予想している。実体は自ら立つものであるよりも立てられたものであったからしてである。

以上は単に立つこと（自動的）と立てられること（被動的）との區別にすぎぬと非難せられたかもしれないが、この転換は重大である。直接なる与件が常に与えられたものとして規定せられることに注意せよ。それと同じように実体も亦自ら立つものではなく、常に自立なものとして立てられたものでなければならぬ。即ち置かれたものでなければならぬ。 *sub-stare (substance) かのびなく sub-ponere (suppositio) かのびなければならぬ。*

さて、このような見方の転換は何を我々に齎らすのであるか。感覚の世界は「存在」であるが、知覚の作用は我々にもたらずに「意味」を以ってする。ここに「意味」の世界が始めて開示せられるのである。赤色をそのまま受容する（感覚する）のは、ただそのようなものがそこにあることを示すにすぎないが、赤色をバラの赤さとして知覚するのは、これを何もかとして解釈することである。存在が「として」の性格をとるのは即ちこれを表現として見ることであるに外ならぬ。いわば平面的な存在が立体的な意味的存在となるのも茲に於いてであった。単なる存在は仮令直接ではあっても、むしろ抽象的である。それが何もかとして性格づけられることによってのみ事物は具体となり個体となる。与えられた赤色はただそこにあるものであるが、それをバラの赤さとして知覚するのはこれを何もかの現われとして見ることであり、即ち表現として見ることである。我々の直接に見るのは単なる赤さではなく、却ってバラの赤さであり、赤さをバラの赤さとして知覚するときのみ、赤さは見られたものとなる。見るものが即ち知ることであるのもこのようにしてであった。意味的存在とは決して単に存在に意味が加えられたものではなく、存在が何らかのものとして理解せられることによってある。存在を何もかとして性格づけることであった。即ち表現的な存在として把握することに外ならなかったのである。

それ故に意味とは存在の外にそれとは別にあるものではない。存在が存在として何らかの性格をもつことであり、

事物が何ものかとして規定せられることである。存在とそして意味があるのではなく、存在の意味が唯一の事実なのである。単なる存在といったものは却って抽象であり、極言すればそのようなものは大凡そあり得ぬとさえいわねばならぬであろう。実体を現象の根柢に置くというのも決してこれを仮置することではなく、現象を何ものかとして、又は何らかの或るものとして有らしめることである。実体とは単なる或るものではなく、此のものであり、まさに此のものであるべきであるが、此のものをして此のものたらしめるのは現象の背後にある本体ではなく、此のものを何ものかとして規定するところの意味でなければならぬ。意味とは有るものを或るものとするところのものである。或るものとは有るものの一部でなく、またその一つの有り方でもない。大凡そ存在とは別の形態をもつものでなければならなかった。この兩者（有ると或る）は恐らく語源を同じくするであろうが（特に日本語に於いて）それらは互に連続するのではなく却って断絶している。或はとは或る謂いということであり、或るものは或る言い方によって言い表わされ、規定せられたものであり、単なるものではなく、意味をもった事物であり、単なる存在でなく、表現された存在である。有るものは或るものとなることによって存在から意味に転ずるのである。意味とは表現された存在であるに外ならなかった。

或るものとは何らかのものであり、未だその何たるかが確定せられていない。事物を或るものと規定しても、その何たるかは知られないことは勿論である。それを直ちに実体に比定することは誤りであり、少なくとも行き過ぎであると非難せらるべきであろう。しかし我々の玆に問題としているのは、そのような確充のことではなく、存在に対して意味が如何にして確立せられ得るかということであった。或るものとは何ものかであり、その何たるかを問わしめる。これを問うというのはその意味を求めることである。事物をそのような角度から規定するのは即ち之を存在としてではなく、意味として把握することに外ならなかった。我々の問題は意味の立場が如何にして起り、且つ意味とは何であるかということであった。意味は事物を志向することによって起るのではない。事象を何ものかとして、

又は何らかの表現として規定することによって生ずるのである。

或るものは単に有るものではなく、何ものかとしてあるものとすれば、これをそのようにあらしむるものは果して何であるか。この問題に答えて実体を立てることは勿論実体を置くことさえ容易には許されぬであろう。有るものを或るものとするのは有るものを何ものかとして規定することである。有るものの何であるかを問うことである。即ち有るもの意味を問うことである。そしてこれを問うことは有るものを単に存在としてではなく、表現として把握することによってのみ可能であるべきであった。なぜなら表現とは単に有るものではなく、何ものかの表象としてあるものであり、現象に対して何らかの意味を与えるものであるからしてである。表現とは何ものかの表出でなければならぬ。しかも何ものかの表現として見るのが即ち現象を意味あらしめることであるとすれば、表現を描いて意味の問題は解決の途が見出され得ぬであろう。現象を「として」見ることはこれを対象として見ることではない、或るものを表現として見ることである、有るものに意味を与えることであつたのである。現象の根柢に実体を置くのもこれをして意味ある事象たらしめんが為であつた。単なる存在ではなく意味ある存在として我々をして理解せしめ得べき事象たらしめんがためであつた。認識とはただ事物の存在を受け容れることではない。見るといふのは外界の印象が視覚を通して我々の脳中に入り来ることではない。色を見る作用は決して赤くはない。考える作用は必ずしも合理的であるとは限らない。見るといふのは色に於いてその意味を見ることである。これを色として見ることにさえ既に意味の理解があつた。意味なきものはたとえそこにあつても、我々はこれを見ないであろう。種々なる事象に出遭つてもこれを知るといふことではないであろう。意味をもつといふのは我々にとってそれが何かの重さをもち、何かの關心をひくことである。況んや有るものをではなく、これを或るものとして見るのはそれに於いて意味を見出すことなしには如何にして可能であろうか。意味は単に理解されるものではなく、直接に見らるべきものである。なぜなら、有るものを或るものとして見るのはその意味を見ることに外ならないのであるから。意味という或るものが別にある

のではない。もしそうならばそれは意味でなく存在であるべきであろうから。存在が意味となるのは有るものが或るものとして規定せられることに外ならなかったのである。

しかし、問題はそれに尽きない。——有るものは如何にして或るものとなり得るか。それを或るものとするのは果して何であるか。普通の考えによればそれが即ち実体であると答えられるのであるが、我々の立場にとってはそのような実体が始めから有るわけではない。有るといわれるのは実体ではなく、ただ事象のみなのであるから。それにも拘らず、なお有るものを或るものとするところのものがなければならぬ。それは意味である。意味を措いて外にはなかった。果してそうであるとすれば、意味は意味として有るところの何もなかでなければならぬ。勿論意味があるということは事物があることとは同一でなく、恰も価値の存在が妥当性であるように、意味の存在性は特殊な性格をもつのであるが、とにかく意味はたしかに有るのである。例えば我々が人と語るとき、そこにあるものは音声であり、音響（物理的）であるが、これを聞く人は決して単にその音声をきいているのでない。音声に於いて意味を理解しているのである。意味の理解せられない言語は単なる音響であり、音声であるとさえ言えない。知らざる外国語は単なる黙舌であるにしかすぎない。音は単なる存在であるが声は意味ある存在であろう。従ってそこには意味というものがある。音が何らかの意味に於いて有るにちがいない。意味は勿論存在ではないが、しかし、或るものとして有るものでなければならぬ。有るものを或るものとするのが意味の作用であるとするならば、或るものとして有ることは意味の本質に属するといえぬであろうか。

意味も亦或るものとしてそれ自ら有るから意味は存在と対在することとなる。意味は存在を離れてあるものではないが、決してそれと同一のものではなく、またその一種でもなく、またその一つの有り方でもない。意味はそれ自らとして一つの或るものであり、その限りに於いて存在とは別なものであり、剩る存在と対立するものとなってくるのである。

然らば意味とはどういうものであるか。それは存在に代えて置かれたものである。存在の根柢に置かれたものではなく、それに代って置かれたものである。実際に存在する犬は様々であり、日本犬、ブルドッグ、シェパードなど種であるが、これらを全て「犬」とよぶのは、此等に代えて犬という名が置かれたのである。名は意味をもつ。それによって意味せられるものは実物であっても必ずしも意味と同一ではない。名は実物を模写するとは限らない。象形文字は事物を模して作られたかもしれないが、文字は必ずしも事物のレプリカではない。現代に於いては文字、言葉は実物とは全くかけ離れたものとなっている。固有名詞は尚一つの事物に密着しているが、普通名詞は既に実物から遊離してそれ自らとしてあるのである。意味は事物に代って置かれたものである。subponere は根柢に置かれたものから、「代って」置かれたものに転換せざるを得なかった。

ところでこの「代置」は尚「仮置」の遺意を残している。これらの諸犬を犬とよぶか、dog と名づけるか chien というかは任意であり、少なくとも ad placitum たることを免れぬであろう。ここに言葉、文字の人為説があらわれるのであるが、凡ての言語がエスペラントの如く人工的に作られたとは言い得まい。少なくとも言葉の発達には歴史的社会的な理由が考えられねばならぬであろう。代置は単なる仮置ではなく、文字通りに事物に代って置かれたものであり、意味はまさにそのようなものとして事物とは別にあるのである。それは有るものであるよりもそれを或るものとするものであり、それによって自ら或るものとなったものである。意味は事物に代って置かれたものである。それが suppositio の第二の意義であり、この作用の第二の階型であったのである。

三

しかし以上のごとく意味を事物から区別し、のみならず、それに対してあるものとするならば、この両者は如何に關係するのであるか、意味はたしかに事物とは別のものであるが、にも拘らず意味は依然として事物の意味でなければ

ばならぬ。意味と事象とがあるのではなく、有るものは専ら事物の意味であり、意味ある事物のみである。意味は存在と如何に關係するのであるか。

意味が事物に代つて置かれたものであるならば、両者は互に「対応する」というよりほかはないであろう。対応の關係とは如何なるものであるか。それは第一に模写の關係ではない。意味は必ずしも実物を模像するものではない。時として全く相似ざるもの間にも対応の關係が成立するからである。次にこの關係はアナログアの論理によつても説明することもできぬ。analogiaとは差異の中に同一を、同一の中に差異を求める論理であり、即ち類比の原理であるからである。しかるに意味と事象との間には類比の關係さえもないことがあり、むしろそのような similarity が見出され得ぬことを常態とするのである。然らば「対応」とは如何なる關係の仕方であるだろうか。例えば数学に於いて二つの量の相等しきことは対応によつて定義せられる。一つの量の各部分に他の量のそれぞれが帰属せられ、そしてそれらの当屬 (zu-ordnung) が完了せられたとき、二量は相等であるという。対応とは互に独立しながら、しかも対応することである。既述の如く suppositio は古代ローマ法に於いて抵当權として通用せられた。抵当とは借金に相当して置かれた物件である。金銭と土地とは全く別物であるが、借金に相応する土地家屋であつてこそ抵当物件となり得るのである。土地が借金に対して置かれるのは價格に於いて対当するからであつて、もしそれだけの價格なきときは抵当物件となり得ぬわけである。抵当權は普通に hypoteca と名づけられたが、特にユスチニアヌスの法典では suppositio と呼ばれたとゞう。hypoteca は文字通りには根柢に置かれたものであるが、茲では明らかに代りに置かれたものとなっている。そして代置物は勿論原物に対応するものであり、抵当するものでなければならなかつた。それ故に抵当とは二つの意味をもっている。一はそれに対して乃至はそれに抗して立つものであるが、第二にそれに応じて乃至はそれに順じてあるものである。凡て対応がこの二面によつて成立すべきであることは抵当とか対当とかいう語が既に之を示している。抵抗と適応とは矛盾した概念ではあるが、むしろそのような逆關係によつてこそ対応

は成立するのである。

それのみでない。互に対応するものは一方の変化に伴って他方も変化し、それらの間に機能的関係が生ずることを特色とする。数学上の関数(函数) (funktion) はこの関係を最もよく表わしたものであろう。スツールの定義によれば x に属する数列の変数が y の一定の数に対応するとき一般に y は x の関数であると言われ、 $y = f(x)$ として定式せられるという (Zuber; Vorlesungen über Differential- und Integralrechnung)。 y として変数 (variable) とは何であるか。それは不定なる数であるが、数にして不定なものがあり得るのか。苟しくそれが数である以上、必ず一定したものでなければならぬ。それ故にフレーゲも言っている。「数は変化しない。角は素数とならず、無理数は有理数に変ずることができない。数は常に一定しており、それについて不定ということは無意味である。不定とは数についての形容詞ではなく、数の機能について副詞的に言われ得るのみである」(G. Frege, What is a function, translation from the philosophical writing of Frege, p. 110)。 x と y とはそれぞれ一定した数であるが、 x が変化するには y も変化し、そこに機能の対応が生ずるとき関数が成立するのである。即ちそれは x と y との対応ではなく、両者の機能の対応でなければならぬ。変数とは機能の変化であり、一方が機能するときそれに対応して他方も亦機能するところの関係を示す。Funktion の概念が導入せられることによって数学は著しく流動的となり、対応の思想も事物から機能に移ったのである。

対応とは以上の如く、一つの事物が他の事物に対置せられるのみでなく、一方の機能に対して他方の機能が相応することであるが、孰れにしてもそれらは単にそこに有るものでなく、そこに置かれたものであるということが第一に注意せられねばならぬ。事物が単にそこに在るのみでは対応ということはあり得ない。一つのもが他物に対して置かれることよってのみそれが成立つのである。対置ということが既にそれを表わしている。対応は対置であり、少なくともそれを土台とするものでなければならなかった。次に対応の関係は最も正確には一と一との対当である。一

なるものに対して他のものが代置せられることである。数学上に於いても対応の関係は一对一の対当 (zu-ordnung) によって定義せられるのが常であった。総量の等しきは部分量の一对一なる対当によって計られたのである。言語に於いてこの関係の最も顯著なのは固有名詞であろう。それは特定の人又は物を命名し、名と実とは一対一的に対当する。ところが普通名詞は果して如何であろう。それが普通名詞であるのは多くの事物に共通であり、乃至は普遍的であることを本質とするのである。犬という語は自家の愛犬のみでなく、一般に多くの犬々を意味すべきであるとするならば、ここには最密な一对一の対当ではなく、一对多の関係が語られているのである。対応の関係はここに到って更に拡張せられると共に面目を一新しなければならぬ。即ちそれは対応の概念の拡充であるよりも拡散であり、遂にはこの概念の破壊に終る。対応とは厳密には一对一の対当でなければならぬ。多なるものに対して一なるものが対置せられるとは如何なることであり、またそれは如何にして可能であるか。それはもはや代置でなくして代表でなければならぬ。これらの推移やその理由については詳述すべく余りに明瞭にすぎるであろう。 *suppositio* の第三階型は代表の概念でなければならなかったのである。

四

以上によって *suppositio* の三階型として「仮置」と「代置」と「代表」とが述べられたが、これらを総して一貫するものは「置く」という思想であった。实体は事象の根柢にあり、又は立つものであるが、意味はそこに置かれたものであり、それに代って置かれたものであり、それに代えて表わされたものである。この三階型は単に *suppositio* の三つの作用であるのではなく共に一つの働きの階型的なる推移である。意味は事物の如くそこに存在するものではない。意味があるというのはそれがどのように置かれているということである。このときそれは誰によって置かれたかという質問は度外する。度外して差支えないのは恰も「与えられたもの」が誰によって与えられたかという問いが

問われないのと同様なのである。与えられたものが直接の経験である如く、置かれたものも根本的な事実であったのである。suppositio は先ず根柢に (sub) 置かれたものでもあったが、それが意味の原理となるときは代りに置かれたものとなる。事象の当体は実体であるが、意味は必ずしも存在でないからして、それは事物の根柢にあるものではなく、事物に代って置かれたものでなければならぬ。代りに置かれたものはその限りに於いて仮置的なものとなるのである。

現代の英語の suppose という語は suppositio のこの意味を残し伝えたものであろう。

しかし代置ということは決して代用ではなくそれ自らの存在理由をもっている。意味は事物に代って置かれたものであるが、それ故に仮置的なものではなく、却って事物を代表するものとなる。単に代ってあるものではなく代って表出するのである。代用品として仮置せられたものでなく、それ自らそのものとして事物を表現するものでなければならなかった。

suppositio の中心義は恐らく第二の階型にあって代置ということにあるのであろう。それが stand for と英訳せられるのも stare pro を直訳したものにちがいない。代置とは一つのものに代えて他のものを置くことである。単に任意に置くことではなく、それに換わるべく、又は換え得べき他のものを置くことである。かくして対応の関係も成立つわけであるが、それは必ずしも一対一の関係に限られていない。しかし対応が一と多との間にあるときはもはや代置とはいえず、代表の概念に発展しなければならなかった。

代表とは代って置くことではなく、代って表わすことである。単なる置換でなく、表出であり表現でなければならぬ。representative は単なる代弁者でなく代表者でなければならなかった。代表者は他の人々と同等の位置に立つものではなく、多くの人々に代ってあるが故にその上に立つべき人である。単に多くの人々の一人であるならば代表者の名に値しないであらう。苟しくも代表者として選ばれる以上は優れたる資質を有し、一派の人々に代って立つた

けの資格を有する人でなければならぬ。それは単なる代人であってはならぬ。代人はその人に代って仮りに置かれたものであり、できるだけ忠実にその人を再現 (represent) すればよいのであるが、代表者は必ずしもその代人ではなく況やその replica であってはならぬ。模倣ではなくして模範でなければならぬ。代型でなくして典型でなければならぬ。代表者は単なる他人の代言者又は代弁者でなく同時に自己の意見をもった人でなくてはならぬ。さもなくば彼は単なるロボットにすぎなくなるであろう。代表は他に対する一でなく多に對する一であり、一に對する多でなく、多なるものの一でなければならぬ。多とそして一とはではなく、多にして同時に一であり、一にして同時に多でなければならぬ。ここではもはや対応の概念が役立つようになる。それは対応の關係でなくまさに表現でなければならなかった。

但しここでも尚一種の対応が残っているとさえ考えられる。恰も代置の概念に仮置の思想が残されているように、表現の世界にも対応の後遺が残されている。表現とは一の他に對する關係ではなく一が多に對する關係であが、しかし一と多とは單に対応するのではない。一は一でありながら同時に多であり、多は多でありつつ同時に一でなければならぬ。一と多とは互に對立しながら、しかも一にして同時に多であるのである。それは表現の世界であった。表現とはこのような關係の仕方を以て特色とするのであるが、さてしかしそのような關係の仕方は如何にして可能であるか、表現とはそもそも何であるだろうか。

表現とは普通に形なきものを形あるものとなし、内的なものを外化することであるといわれるのであるが、それは勿論淺薄なる理解であって定義とさえなり得ぬものであろう。表現とは多なるものの中に一なるものを見、一なるものが多を表わすことでなければならぬ。ここでも一は多に對してあるが、一の外に多があるのではなく、多に抗して一があるのではない。一は一でありながら同時に多であり、多は他でありながら同時に一であるようにあるのである。ここでも「對して立つ」(stare pro, stand for) という關係が残されてはいるが、それはもはや対応の關係ではな

った。既述の如く対応には対してありながら、それに順当する思想が見られたが、表現に於いてはこの関係がさらに徹底せられ、一と多とは一と他との関係から一にして同時に他であり、一にして同時に多であるところの関係となるのである。この関係は単なる相依又は相待の関係ではない。一があるのは他に依ってであり、他は一を待って初めてあり得るといふのは相依相待の論理であり乃至は「即」の論理であるが、表現の立場はそれとも異っている。相待の論理は極端にいえば、右は左を待ってあり、上は下によってあるという概念的関係に墮してしまふ。それは関係の論理的説明ではあつても真実なる関係の仕方ではあり得ぬといわねばならぬ。

存在の世界は、一であるか他であるか、多であるか一であるかであつて、一にして同時に他であり一でありながら同時に多であることは不可能である。高々一は他に依つて又は多を待つてあるとしかいえないであらう。このような関係の生じ得るのは表現の立場に於てのみであつてその外にはない。表現の世界はここに於て存在の世界とは明別せられる、表現とは単なる存在ではなかつたのである。存在の世界に於いては一はどこまでも一であり多は遂に多であつて一にして同時に多であることはできぬ。もしそれが可能であるとすれば、存在は徒らに混乱し乃至は混濁するよりほかはないであらう。一にして同時に多であることは如何にして可能であるか。それは存在に於いてではなく表現の世界に於いてのみ可能であり、又は許され得る事実なのである。

しかし表現とは何であるか。表現の世界とは如何なるものであるだろうか。先ず現象の世界といふものをとつて見よう。直接に与えられたものは事象であり現象であるという。現象とは事物の現にそこにあり現にそこに現われた世界である。現象という語が既に表現態を言い表わしている。現象に於いてすでに表現の事実に出遭うのであつてそれは我々の日常経験から程遠きものではなかつた。

ところで現象はたえず変化し人々によつて夫々異つたものであると言ふ。のみならず一つの現象についてもその上に落ち来る光の強弱によつて様々なる様相を呈すると言ふ。フッサールはこれを *Abschattung* と名づけた。この名

はもとより陰影から由来するものであるが、現象と訳せられる *Phänomenon* という語がそもそも *phai-nomenon* であり、光 (*phos*) によって照しだされたものであることを証しているのである。

シャッフはこの点について知覚の現象学を詳述している (*Beiträge zur Phänomenologie der Wahrnehmung*. 1910)。最近ではメルロー・ポンティの研究も注目せられて *Leçon de Merleau-Ponty: Phänomenologie de la perception*. 1945)。

しかし我々にとって問題となるのは、現象が何らかの表態であるとするれば、これを表わすところのものは何であるか。現象は種々なる象面を呈するが、それらは何の象面であるかということである。現象を象面と見るからには何ものかの相面でなければならぬ。現象が種々であり多様であるならばそれは一つのものの多面でなければならぬ。多くの象面と一なる事物とは如何なる関係に於いてあるのであるか。

通説によればこれらの象面は一つの事物の属性と考えられ、事物と現象との関係は実体と属性との関係であるという。しかしそういう考え方には一つの独断がある。即ち現象の根柢には物そのものがあり、そしてそれは凡ゆる象面を越えてそれとは別に存在するということである。

ところが我々の直接に見るのは依然として現象面であってその外の、又はそれ以上の何ものでもない。たとえ現象の背後に実体があるとしても、我々はこれを経験することができない。所詮実体とは現象に対して立つものにすぎない。否、対して立つ (*stand for*) ものでなく、対して置かれたものにすぎない。そのようなものは果して実体とよばれるに値するものであろうか。

或はこうも考え得るであらう。対して置くというのことはこれを指示することである。実体はそこにあるものでなく、指示せられたものであり、指示せられたものとしてそこに置かれたものである。しかしそのように考えてみても指示するというのは現象によってであり、又はそれを通してであって、それを外にしては指示することも不可能なはずである。僅かに象面を通して実体が想見せられるのみであるならば、現象に比して実体は果してどれだけの重さと権威

とを有し得るだろうか。

シャップはそれ故に実体概念をすてて「イデー」を以ってこれに代えようとした (op. cit. p. 129)。

それは次の如くであろう。様々な現象に統一性を与えてこれらをして一つのものの象面とするのは、実体でなくしてイデーであるという。しかしイデーとは何であるか。それは単なる「觀念」でないことは勿論プラトンの「イデア」でもないことは明かであるが、現象の根柢にイデーを置くことは何を我々にもたらすだろうか。イデーはエイドスであり、単に有るものでなく見られたる或るものであり、単なる実体でなく、むしろ現象をして現象たらしめるところのものであるが、しかしそれは依然として或るものであり、有るところのものでなければならぬ。つまりは実体に換えて置かれたものである。シャップは例えば空間を一つのイデーと考える。色を形の限界として把握せしめるものはイデーとしての空間である。形は色と線とによってつくられるが共に空間の限界である。限界 (Grenze) のない空間は単なる空虚にすぎぬ。空間をみたすものは色であり、色なき空間も白さとして常に一つの色相を呈する。東洋画に於いて見られる空白はただ空虚な背面ではなく況や無意味な空白ではなく、それ自らに積極的な空間を描出しているのである。インドの芸術、就中ヒンヅの彫刻が所せまく彫像をつらね、時として煩わしきまでに諸像を重ねるのも、充填性によって空間を構成せんとしたものであっただろう (例えばサンチやナーガルジュナコンダに於ける仏教説話的彫像を見よ)。空間は事物によって充填せられることによって具体的に展開せられ得るのである。事実のあるところに空間があるのであって、充されない空間は単なる空虚であるか又は抽象であるにすぎぬ。空間はカントの考えたようにアプリアリナ形式ではない。それは存在と共にありそれなくしては何ものとしてもあり得ぬものなのである。空間があつてその中に事物があるのでなく存在のあるところに、そしてその限りに於いてのみ空間があり得るのである。事物とは空間を限界づけそしてそれをして形あるものとするところのものである。この充填性なしには空間はどこにも存在しないであろう。空間は空白でなく空間として或るものでなければならぬ。平面とか立体とい

うのも単なる面乃至は方向であるのではなく、必ず何らか物体の平面であり何かの物像の立面でなければならぬ。

シャップはこの限界づけるものをイデーとして考えているようであるが、我々はさらに一步をすすめて問わねばならぬ。事物を限界づけるイデーは空間であるが、空間を限界づけるイデーはそもそも何であるか。空間は一つのイデーであるがさらに空間をつくるイデーは何であるのか。我々はここにイデーのイデーを考え、さらにその何たるかを問わねばならぬであろう。シャップは言う、「イデーはそれ自ら厳密な統一性である。イデーを見るときは事物をそのものとして見ることである。我々は事物をイデーに於いて見なければならぬ。イデーが事物を限界するのであるから」(op. cit. p. 156)。まことにその如くであろう。我々が事物を見るのはただ様々なる現象面に目をうつすのではなく、これらに於いてそのイデーを見るのである。イデーは様々なる現象を一つの事物の現象面として統一あらしめるところのものに外ならないのであるから。例えば空間は一つのイデーとして事物を限界づけそしてそれによって一つの個体をつくりあげる。空間とは限界づける一つのイデーであるに外ならなかったという。それまではよい。しかし空間は事物を限界づけるものであっても、これをそのものとして決定し得るものであるかどうか。イデーが個体を形成し得るとしても、個体をこのものとして規定するにはさらに別のイデーを要するわけであろう。イデーはさらにイデーのイデーを要求する。それが逆行を誘発するからには、イデーを立ててみても要するに説明を重複するにすぎぬこととなる。シャップのイデーは実体の代りに置かれたものであるが、それは依然として存在であり、イデーと現象との関係も存在的であり、高々存在論的であるにすぎない。しかしこの問題は存在によってではなく、表現として把握せられることによって始めて解決せられ得るのではないだろうか。実体は表現するものであり、現象は表現せられたものである。事象はただそこに在るものでなく、表現せられたものとしてある。イデーと現象との関係も専ら表現的に把握せられねばならぬ。実体があってその属性として現象があるのではなく、またイデーがあってその限界として事物があるのでもない。それらは凡て存在的乃至は存在論的立場に於いて考えられたものであり、そして

その限りに於いてこの問題は解決せられるに由なきものである。

しかし事象をそこにあるものとしてではなく、表現されたものとして見るといふのは如何なることであるか。表現も表出されてあるからにはそのようにそこにあるのであって、存在と表現とは根本的に異つたものではないと考えられるかもしれない。しかし表現は単にそこにあるものではなく、そこに表出されたものでなければならぬ。存在については必ずしもその由来をたずねる必要はないが、表現については必ずそれが何もの表出であるか、及びそれが何を表現するかが問題とならざるを得ぬのである。これを裏がえして言えば表現には必ず表現するものと表現されるものとが含まれていなければならぬ。我々は色に於いて形を見、形に於いて物を見る。ただ色を見るのではなく、形ある色を見、単に形を見るのではなく、物の形を見るのである。単に赤い色を見るのではなくしてバラの赤さを見ているのである。我々はさきに、知覚とは単に感覺することではなく、これを何ものかとして見ることであると云つた。知覚にあらわれる現象はただそこにあるものでなくして、何ものかとして有る事象であり、必ず何らかの *als-character* をもつたものでなければならぬと主張した。それは事象を存在としてではなく表現として見ることに外ならなかつたのである。赤き色をバラの赤さとして見るのはこれをバラの表現として見ることである。何ものかとして見るのは決してこれを対象論的に見ることではない。我々の立場を対象論的ときめてかかることほど誤解の甚しいものはないであろう。我々の直接に見るものは赤い色とそしてバラの花とではない、赤いバラの花である。単に赤い色を見るだけでは未だ何を見たともいえない。赤いバラの花を見ることによつて始めて知覚はあるのである。これをバラの赤さとして見るのは赤い色に加えてバラの存在を推定することではない、直下に端的に赤いバラの花を見るのである。赤きはバラの赤さであり、バラは赤さに於いて自らを表出する。現象が表現された事象であることもここに於いて初めて可能となる。表現に於いて表出するものとせられたものとは一となる。表現されたものの外に表出するものはなく、表出する限りに於いて表現があるのみである。現象の根柢に別に実体を措定する必要はどこにあるのであろう。

我々にとっては与えられた直接経験が現象の凡てである。その背後に物自体を立てることは勿論、これを置くことさえ必要ではなかった。なぜなら現象は単なる存在でなく表現的存在であり、単なる事象ではなく意味的存在であるべきであつたからしてである。意味とは現象から区別されたイデーではなく、現象をして何らかの表現としてあらしめることによるものである。現象が単なる存在としてある以上何の意味をもたぬであろう。それが何ものかの表現であることによつて意味あるものとなるのである。否、現象が存在であるということすら既に意味によつてあり得るのである。なぜならそれは既に何ものかを語っているのであるから。何ごとかを語るものは総じて意味に属する。意味なしには何を語り何を聞くと言ひ得るのであろうか。

現象は様々に異り種々に變化するであらう。一つの事物はこれを見る人の立場によつて、又は見られる角度によつて様々なる象面を呈するにちがいない。しかしこれらはまだ支離滅裂な断面であるのではなく、共に一つの事物の象面としてつながっている。その一つ象面をとつてみてもそれが何の現象であるかが直視し得られるほどに緊密な内的關係をもっている。ところでこれらの現象に一つの統一を与えるものは何であるか。それはいうまでもなく事物そのものであり物自体であると答へたく思ふであらう。しかし我々の直視し得るものは現象のみであつてその他の何ものでもないとするれば、物自体を立てることは何の要があるか。それはカントの如く不可知と断定するか、または現象を通して僅かに指示せられたものと考えるより外はないであらう。一片の赤さに於いて花を見るのはそれを通して花を指示することである。それは単なる想定ではなく、直下なる指示である。花は赤さに於いて直接に指示せられている。そして指示とは意味作用であるとすれば、一片の赤さといえども何ものかを意味していなければならぬ。与えられた赤さを花の赤さとして知覚するのは色について意味を知ることである。意味を知ることによつて事物は始めて具体的に把握されたものとなるのである。知るとはただ与えられた感覚をそのままに受けとることではない。その何たるかを知ることである、その如何にあるかのみならず、それが何であり、何ものであるかを知ることではなければな

らぬ。即ち知るとは意味を知ることである。意味とはそのそこに在ることをではなく、その何であるかを開示するものなのであるから。

しかし指示作用はそれだけで意味を構成することができるか。それは象面を通して何ものかを指示するかもしれないが、未だその何たるかを開示することはできぬ。指示とは何ものかを指定するが、時には単なる方向を示し又は夫を辿る場合もあるかもしれない、否、指示とは志向作用であり単にそれに向い志す作用であるにすぎない。指示の対象として物自体を置くことはつまりは指定であり想定にすぎぬといわねばならぬものようである。

実体は単に現象の彼方に指定せられたものではなかった。それはそれ自ら自らを表現するものであり、表出された事象、即ち現象の外に又はそれを越えてそれ自らとしてあるものではなかった。実体にして表現せられないものは仮体であるにすぎぬであろう。実体は現象の根柢に在るものであるという、それは第一段の過誤である。なぜならそのような実体は遂に知るよしもないのであるから。実体はそこに置かれてあるものであるという。それは第二の過誤である。なぜなら置かれるのは仮りに置かれることであり、いかに置いてみても仮託又は仮設にすぎぬであろうから。置くことはそれ故に代って置くことに転換せられたが、それも任意なる代置であるならば仮置の概念を脱却するに由ないであろう。代置は第三に代表に移らねばならぬ。それは置かれたものではなく、代ってあるものであり、単に有るものでなく代って表わすものでなければならぬ。代るとは単に代理することではなく況や代置ではなく、まさに表現することではなければならぬ。即ち存在は表現に転格せられねばならぬ。存在の世界から意味の世界に転換せられねばならない。実体はこの転移と転格とによって全く代えられてしまう。単に換えられるのではなくして自ら代るのである。代えられるのは他によってであるが、代るのは自らによって自らを代えるのである。代えられるとともに代わるのである。それが即ち代表ということであった。代表とは他に代えて置かれたものではなく、他に代って自ら表わすものでなければならぬ。そうでなければ単なる代員にすぎなくなるであろう。しかしそれと共にただ自ら有るも

のではなく、自らによって置かれたものでなければならぬ。なぜなら代つてある以上は他に對し他に依つてあるからである。他に對してあるのはそれに対応するよりも他を表現することではなければならぬ。代表者は先ず他の多くの人々の意見をきく。これを表出するのはただこれを伝え、受領するのみでなく、同時に之を自己のものとして表出するものである。代表とは他に代りつつ自らを表現するものでなければならぬ。自らを表出しながら他を表現するものでなければならぬ。単に自己のみを表出するならば独断となり、ただ他に代つて表わすのみならば自主性を失つてしまう。そのいづれにも表現の世界はなかつたのである。

我々にとつて最も重大なことは与えられたる直接経験を單なる存在としてではなく、これを表現として把握することである。それはただそこに在るものではなく、表現せられたものとしてある。単にそこに横たわるものではなく、何ものかを表わすものとしてあらねばならなかつた。何ものかを表わすとは之を意味することである。事物は單なる存在ではなく意味的存在でなければならぬ。表現とは即ちそれをいうのである。

それ故に表現は二つのことを同時に含んでいる。一方にそれは何ものかの表態であるということと他方に何ものかを表示するということである。表現と表出とを強いて区別すれば、表現とは前者の事態であり、表出とは後者の能作であろう。表現の問題はとにかくこの二つの側面から研究せられねばならない。

先ず一つの事象が表現として把握せられるのは何によつてであるか。それは事象が單にそこに在るのではなく何ものかによつて表出せられ、何ものかの表態であると考えられることである。たとえば繪画は自然の表現であり自然は神の表現であるという。そこには表出するものと表現せられたものとの区別があり、しかもこの差別をこえて両者は密接に結合している。因果の關係に於ては原因は結果に先き立ち兩者は時間的に隔てられているが、表現するものとせられたものとは同時に同処にあつて、決して離れてはいない。表出する限りに於いて表現があり、表現のあるところに表出があり得るのである。表現の關係は因果の關係ではなかつた。現象の原因として物自体を考えることの誤り

もここにあるであらう。实体は現象の根柢に在るものではなく、そこに置かれたものである。置かれるとは或るもののある限りに於いてそこにあることであつて絶待に又は絶対にあることではない。实体があつてそれが現象するのではなく現象する限りに於いて実体があるのである。それが置かれるということであつた。しかし実体が置かれるのは単にそこに置かれるのではなく、代つて置かれることである。代つて置くとはそのものの代りに別のものを置くことではなく、そのものを代表することではなければならない。ここに記号 (sign) と象徴 (symbol) との区別がある。記号は一のものに代りに置かれた他のものであるが (例えば赤旗と危険と) 象徴は一つが多を代表するものである (例えば日章旗と日本と)。意味は事物の代りに置かれたものではなく、事物を表現するものでなければならなかつた。事物は意味をもつことによつて表現せられたものとなる。意味は存在を表現にもたらずところのものであつた。存在が表現されるとはその何たるかが語られることである。その如何にあるかが語られることである。語るとは意味を語るより外にはなかつたのである。

以上によつて表現が何の表出であるかが論ぜられたが、次に表現が何を表出するかということを問題としよう。存在はただそこに在るものであるが表現は何ものかを表現しなければならぬ。表現によつて表出せられるのは何であるだろうか。それは単なる事物ではなく事象である。事象ではなく事態である。それはただ有るものではなく或るものでなければならぬ。しかしあるものを或るものたらしむのは何であるか。それは意味である。なぜなら或るものとは何ものかでありそれについてその何たるかを明らかにすることが即ちその意味を開示する所以に外ならなかつたからである。表現とは意味の表現でなければならぬ。表現にして意味に非ざるものではなく、意味にして表現ならざるものはない。表現によつて表出せられるものは存在であるよりも意味ある存在でなければならなかつた。それは現象を何ものかとして把握せしめるものである。ただ現象を感覺することではなくこれを或るものとして知覚することである。既述の如く「としての性格」(als-character) は有るものを或るものたらしめ、有るもの何たるかを表示する

ものであり、それ故に有るものの意味を構成するものであったのである。

五

以上のような思想に最も近いものはライブニッツのモナドであろう。それは個体であり单子であるが決してアトムではなかった。アトムは物質の単位であるが、モナドは表現の单子である。单子の存在性は *perception* と *appetition* にあるといわれるが、先ず *perception* とは何であるか。これは普通に知覚又は表象と訳せられ、微小知覚 (*petite perception*) などという語もあるが、ライブニッツの用語は心理学に於ける表象又は知覚の概念とは大凡かけ離れたものであることを第一に注意しなければならぬ。*perception* は *expression* である。知覚とは表現である。そして表現とは「一つのものの中に多なるものが表示せられることである」(*l'expression de la multitude dans l'unité*, G. W. III, 69, *Leibniz au Bayle*) ——それがライブニッツの根本的テーゼであった。しかもモナドは単なる個体ではなく表現体である。否、それは表現体であることによって個体であるところのものである。それ故に彼は個体を屢鏡に譬えた。単なる鏡でなく生きたる鏡であり、内的活動力をもった鏡であり、世界を自己の立場に従って写し出す鏡であるという。鏡が宇宙を写すのは知覚であるが、写された万象が鏡の中に表出されるのは鏡の表現である。鏡は事物を写すと共に之を表出する。鏡は死したる器具にしかすぎないが、モナドは生ける鏡であり、表現する個体である。その存在様式は表現であり、表出を措いて外にはなかった。

しかもモナドには窓がないと言う。そこに窓があるならば外界の物象は窓によって又は窓を通して写され得るであろう。しかし窓は壁面の一部であり、それを通じてのみ外物が指示せられるならば、それはまさに *intentiono* の世界であろう。人は窓の開かれてある限りに於いてのみ外物を知覚することができる。しかし我々はこれによって全体を知覚することができぬ。単に一部を指示することはできても全体を表現することができない。それ故にモナドは窓

をもつてはいない。モノダは無窓である。しかしこのことは何を意味するのであるか。窓を閉ざすが故に、内部は暗黒であるとも考えられるが、モノダの全部が窓であるとも解し得る。後者の場合モノダは全面的に窓であり、表現であると言えるが、前者の場合にもモノダは暗黒でありながらむしろその故に全体をうつつし又は表現すると言ひ得るのではないか。窓からして写される外界は部分的であり、高々その一部にすぎない。無窓のモノダの写すものは却つてそれ故に多であり全てでもあり得る。それは写すのではなく表わすのである。写し得るのは一部であるが、表現に於いては一にして一切を表わし得るのである。インテンチオの立場に於いては事物は指示せられるがそれは専ら窓を通じてであり、窓が開かれている限りに於いてであった。窓なきモノダは全く外界から遮断せられている、外界から受けられるのではなく、外界を表出するものである。これは一般の経験論者の最も奇異とする所であり、ロツツェなども批難する点であるが、(Lotze, *Metaphysik*, § 63-67) しかしそれはラッセルも弁明しているようにモノダに対する根本的な誤解にすぎぬであろう (Russell, *A critical exposition of the philosophy of Leibniz*, p. 135)。ライブニツツに於つて一つのモノダに対するものは外界ではなく、他のモノダである。世の中はモノダとモノダとの関係から成立している。そしてこれらの関係を支配するものは因果関係ではなく、表出の関係でなければならなかった。因果関係にはアンチノミーを伴う。因果の系列には最初に原因があるとも考えられるし、原因の原因を溯れば遂に原因を見失つてしまふ。また因果関係はそれ自らに矛盾を蔵する。例えば経験には物自体が原因として前提せられながら、しかもこれを経験することができない等々。ライブニツツの立場はこれに反して表出の原理によって貫かれている。モノダは常に外界を表出するのみでなく、それ自ら表現である。むしろ自らを表現することによって外界を表出するのである。窓なきモノダは暗黒なるが故にむしろ包蔵しながら未発展の状態にある。微小知覚とは即ちそれであった。

モノダが外界を表出するのは自己でありながら他のモノダを表現することであるが、この場合それは如何にして可能であるか。モノダはそれぞれ個体として別々に存在するとすればこれらは互に如何にして関係し得るのであるか。

この問題をとく鍵も表現の概念にある。ライブニッツは言う「一つの事物が他のものを表出するというのは、一と他とについて言われ得ることが互に恒常的な、規則正しい関係にあることである。例えば投影図が原物の射影的表出であるように」(II, 112)。原物とその投影とは勿論同一ではなく、そこには同様性さえないかもしれない。「表現又は表出は完全に同様であることを要しない。比例してさえいけば十分なのである」(Discours, I, p. 48)。比例とはそれぞれ異りながら、しかも互に対応していることである。類似性が対応性に置換された点にライブニッツの著名な考え方があるのであるが、しかし対応とは何であるか。また対応するのは全体が全体に、部分が部分に対してであるか。そうすればモノダは全体と部分とより成りアトムのならざるを得ないであろう。ライブニッツのモノダは決してアトムではなく部分とか全体とかいう量的なものではなかった。

対応とは要するに一と一との関係であって、我々の立場からいえばそれは *suppositio* の第二義を原理としている。それは一に対して他を置き他の代りに一を置くものである。記号は事物の代りに置かれ、意味は存在の代弁者であるにすぎない。何故に一の代りに他を置かねばならぬか、それは時として便宜上のことであり、少くとも *ad placitum* の域を脱し得ないであろう。表現とは単なる代置ではなく代表でなければならぬ。代表とは一に対して多を置き、多に対して一を代わらしめることである、一にして多を表わし、他でありながら一を表出するものでなければならぬ。モノダの表出するものは他の一つのモノダではなく、多くのモノダであり、宇宙全体でさえあった。モノダはそれぞれ自己の立場から又は各々の異なる見方に従って (*selon les différents points de vue, Monad. 59*) 全体的なものを表出するが故に互に対応し関連し調和しているのである。一つの個体が他のそれを写すのではなく、多くの個体がそれぞれに同一なるものを異った見地から表わすが故に、一は他によって知られ、一と他とは共通性を得ることができるのである。対応の根拠は却って個物のそれぞれなる表現にあって決してその逆ではなかった。ライブニッツはこれを「予定調和」と名づけたがために世の人々のきびしい批難を蒙ったが、しかしそれは一種の窮策 (*deus ex machina*)

に止るものではない。それは対応の根拠として表現を置くことである。ラッセルも「perception は予定調和と殆ど區別できないものである。ただ後者には多の統一というものが無いだけである」(Russell, op. cit. p. 133) といっている。即ちそれは単なる perception ではなく、apperception 又は sensio でなければならなかった。

apperception はカントに於いてのように統覚をいうのではない。perceptio は意識をもたない表象であるが、apperceptio は意識をもつた、又は綜合せられた表象(表現)をいうのである。Stücker, Die Leibnizschen Begriffe der Perception und Apperception, 1900 参照。

表現とはたとえ対応ではあっても一が一に対する関係ではなく、一と多との対応でなければならぬ。しかしそのような関係は如何にして可能であるか。一は一に対応しても一は多と対応することはできない。対応とは一つのものが他の一つのものに相当 (zu-ordnen) せられることに外ならぬからである。一と多との関係はそれ故に代置ではなく、代表でなければならぬ。一にして多を演出し多に於いて一が表現せられるところに表現が成り立つ。それは個体であると同時に全体である。個にして全体に代って演出せられたものである。全にして個をなすものとしてあるものである。代表者とは多くの人々の意見を集成しながらしかも個人の意志をもつ人であり、単に多数のロボットであってはならぬ。また個人として独走し乃至は他人に対して独裁者であってはならぬ。ライブニッツにとってはモナドに対するものは他のモナドであり、決して単なる事物ではなかった。他の事物がモナドに刺戟して知覚が生ずるのではなく、各々のモナドは無窓でありそれぞれに独存しながらしかも他の諸々のモナドに対してのみ成立するのである。単子は単子に対してのみ単子であるという。それは単にモナドの相対性を言うのではなく、モナドが個体でありながら同時に全体的存在であることを主張するのである。それはただ量的に分ちつづけて遂に分つべからざるものとなったアトムではなく、質的にして力ある単子であるべきであった。モナドの内容は専ら表現力にある。それは靜的に他の個体に対して立ち乃至は対応するものでなく、他と対応しながらそれを内に蔵し外に表出せんとするものである。こ

の働きは欲求 (appetitus) と名づけられた。それは一つの表象から他の表象に向う動向であり、他の表象への変化若しくは推移を起す内的原理である (Mondologie, S. 15)。欲求も亦表出の運動に外ならなかった。モナドの本質は表現とその発展とにある。それは世界を表出するのみならず世界自身の表現である。モナドの表示するものは世界であるとともにそれ自ら世界の表現であるからして、モナドにとって自己を表現することが即ち世界を表示することとなるのである。モナドは表現体であって単なる存在ではなかった。個体であって単なる実体ではなかった。凡てを表現の立場から見るとはライブニッツに於いて最も徹底したものとなったといわねばならぬ。そこにも種々なる難点(例えば個体の根拠の問題など)が残されているが、とにかく表現の立場はライブニッツによって齎された人類の大なる遺産であろう。我々はこれに加えて表現の原理を *suppositio* に於いて求めんとするのである。(この項了)

(筆者 京都大学「文学部哲学」名誉教授)